サンプル

一.

「もぉっ、出ない…っ！」

「すまない、もう少し付き合ってくれ」

米国での急なトラブル、そう言って篠崎は渡米していた。半年ぶりの帰国に待ちきれず、空港近くのシティホテルのベッドの上。飛行機の到着は夕方で、それから貪り合って、今はもう二十二時を過ぎている。いや、時計を確認したのは随分前だ。喘ぎすぎた安西の声が枯れ、篠崎に口移しで水を飲ませてもらった、そのときだった。それからすでに何度か達している。もう日付が回っていてもおかしくない。

この半年、会えない寂しさを紛らわすために、そして帰国の際にまとまった休みを取るためにほぼ無休で働いてきた。それは篠崎も同じで、お互い連絡も疎かだった。自宅は寝るための部屋というより、着替えを置いてあるだけの部屋へと成り下がり、つまりは必然的に自慰も怠っていた。そのせいで安西の精巣の機能はだいぶ衰えていたらしい。後孔の良いところを何度も剛直で擦られ、すでにカウパーすら出てこない。出しきった。まさにその一言に尽きる。

「っあ――――――！！！」

「っ……く、」

直腸が篠崎のペニスの脈動を感じ、達したことを実感する。気持ちいい。中にいっぱい。最初はスキンを使っていたのに、それも途中で足りなくなった。それからは当然のように生になった。スキンがないから終わりにしようなんて考えは互いになかった。

「あ……すごい……」

「うん？」

「中出し、きもちい……」

「っ！君は！」

埋まったままの篠崎がまた大きくなる。でもさすがに限界だ。安西は覆い被さったままの篠崎の首に腕を伸ばし、そのまま隣に寝転ぶよう誘導した。とさり、篠崎もおとなしく従う。ずるりと抜ける感覚に背筋がゾクゾクする。とても名残惜しいが、もう無理だ。二人して汗だくだ。でもその汗さえ身体中を擦り付けあってお互いに刷り込みたいとさえ思ってしまう。

「篠崎、おかえりなさい」

「ああ、ただいま」

ちゅ、と音を立てながら唇を吸う。至近距離で目を合わせ、なんとなく気恥ずかしくて笑う。

「……あっ！！！」

「ん？」

「あ、出ちゃ……」
一番奥に出されたせいで、流れ出るのに時間がかかったらしい。今ごろドロリと尻に不快感を覚える。
「ああ……シャワーに行くか？」
「ん……やだ、もう少し……」
「ん？動けないだろうから抱えていってやるぞ」
「ちが……」
篠崎は「もう少し休んでいたい」と捉えたらしい。
「もう少し……中に……」
「っ……わかった、流れ出たのだけ拭おう」
篠崎は一瞬殺気立ったような気配を纏ったがすぐに落ち着かせると枕元のティッシュを数枚抜き取った。安西はくるりと四つん這いになると頭を下げ、尻を上げた。
「……！全く君は……」
「ん……なるべく奥……戻るように……」
篠崎の視界には誘うように掲げられた尻と、ひくひくと蠢くアナル。そしてそこから垂れる白濁。
「すまない、耐えてくれ」
「え？あっ、あ、うそ、あ――っ」
篠崎は硬く勃起したペニスを勢いよく打ち付けた。擦られ過ぎて熱を持ったそこが篠崎を締め付ける。
「あんっ、あっ、やだぁ、もぉむりいっ」
「諒、中でいけるな？」
「あっ、ああっ、やだぁっ」
「っく、諒っ」
パンパンと激しい肉音が室内に響く。ギシギシとベッドが鳴らないのはさすが高級シティホテルだからか。
「あんっ、あ、あ、あ、いいっ、いっ、あっ」
開きっぱなしの安西の口からはもう意味のある言葉は出てこない。ただひたすら母音だけが発せられる。
「諒っ、アナルのシワが伸びきってるぞっ」
「やぁああ！！」
安西が自らした姿勢のせいで、そのもはや性器と化したそこは篠崎に丸見えだ。貪欲にペニスに食らいついているそこは赤く色付いていて、篠崎の指に撫でられると更にぎゅうぎゅうと絞り込んでしまう。
「っく、そんな絞めるな」
「むりいっ、あっ、だめ、おちんちんもっ、してえっ」

「ん？出ないんだろう？」
「出ないっ、でないけどっ、出したいいい」
チッ、という舌打ちのあと、篠崎の左手が安西のペニスを握った。
「勃ってないぞ」
「うそ、うそおっ、やだぁっ」
「は、っ、もう後ろだけでイってくれ」
「やだぁ、やだあっっ！」
「っ、すまない、出すぞ」
「あ、そこっ！もっとゴリゴリしてえっ」
篠崎のペニスがピンポイントで安西の前立腺を擦り、安西はペニスを勃起させないまま中で達した。篠崎もすぐに後を追うようにして最奥に精を吐き出す。
「あ……はぁ……」
「はぁ……大丈夫か？」
「……ばか……」
「ああ、すまない」
「……お尻、抜かないで」
「ん？」
「そのまま栓、してて」
「諒、わざとか？」
「え？」
「いや……」
篠崎はゆっくりと安西の足を伸ばしてやり、そのまま体重を下ろしていく。所謂寝バックの姿勢になって安西の耳にキスを落とす。
「ん……それすき……」
「今日は素直だな」
篠崎が耳元で囁く。
「……素直な僕は嫌ですか？」
安西の返しも、まるで内緒話をするかのように囁き声だ。漸く余裕を取り戻した、情事後の言葉の愛撫。
「まさか。ただ、これ以上したら君に嫌われそうだ」
「ふふ、またおっきくなってますもんね」
安西がギュッと尻に力を込め、締め付ける。
「あんっ」
「っ、諒、」
いたずらのつもりが安西まで感じてしまい甘い声が漏れる。
「ふふ……あー……ちょっと休憩……」

「ああ……抜くぞ」
「んっ……あ、やだ、でちゃ…」
「いきんで出してごらん」
見ていてあげよう、と素早くティッシュを手にした篠崎が尻を撫でる。
「やだ、恥ずかしい……」
「諒」
「んっ…」
寝ころんだままの姿勢でいきんでみても流れ出ない。安西は膝を立てると四つん這いになり尻をつきだした。腕は伸ばし、お尻を低くする。
「んっ、ん……ふ……」
「ああ……とてもいやらしい……アナルがぷくりと膨れているよ」
擦られ過ぎて赤く腫れたそこはぴくぴくとしながらぷっくりと膨れ、中心からとろりと白濁が溢れ出る。
「あっ、」
篠崎の指が膨らんだそこを撫でる。くちゅり、と白濁が音を立てた。
「やぁ、」
「ほら、もっといきんで」
安西が恥ずかしがって力を抜いたことでアナルの膨らみは消えてしまった。篠崎は平らなアナルの表面を指の腹で時計回りにくるくると撫でる。
「あっ……ん～～～っっっ」
安西がいきむと同時に再びアナルが膨れ、白濁が流れる。
「ん～～～ッ」
だらだらと流れ落ちるのを見ていたい気持ちを抑え、篠崎はティッシュでそれを拭った。安西は尻を拭われるのが好きだ。直接的に聞いたことはないが、普段の様子から篠崎はそう確信していた。

二.
「……え？」
気がつくと真っ白な部屋にいた。つい先ほどまで空港近くのホテルにいたはずなのに。
「これは……なんだ？夢か？」
「夢……なんでしょうか」
室内は真っ白だ。窓もない。家具も何もない。ただ白いだけの箱。一ヶ所、ドアらしきものはあるがドアノブはない。自動ドアだろうか。
「ホテルにいたはずだ」
「ええ、篠崎が帰国して、空港近くのホテルで……ええと……寝てました……っけ？」

「いや、君が、俺が出したものを出」
「ちょ、そこまでの詳細は言わなくていいです！」
「だが状況の確認は必要だろう」
「なら一言ずつ進めますか」
「ああ……」
「篠崎に……その……拭いてもらって」
「抱えてシャワーに行った」
「……あれ、」
「……ああ……浴室のドアを開けたところまでは覚えているが」
「ええ、それから……え、ここ、ホテルの浴室じゃないですよね？」
そうでないことは分かりきっていたが、思考が追い付かない。これは夢ではなく、自分は意識がはっきりしている自覚があった。論理的な会話も成り立っている。
「服も着ていなかったはずだ」
「ええ……」
しかし今は二人ともきちんと服を着込んでいる。服装はお互い今日着ていたもので間違いない。これは一体どういうことか。
「こんな何もない部屋がホテルの一室にあるとも思えんが」
二人で部屋を見渡す。六畳ほどの真っ白い部屋。
「このドアは……」
「おかしいですよね」
見た限り、スライドドアではない。しかし、押し引きするタイプにしてはノブがない。蝶番もない。
「ドアに見せかけた壁紙……みたいだな」
篠崎が警戒しながらもドアに近づく。安西も周りに変化がないか確認するが、特に変わった様子はない、と思ったとき――
ビ――――
何かエラーを示すかのような音が響き渡った。
そしてその音とともに、部屋の真ん中にタブレットらしきものが出現した。
篠崎と二人、画面を覗き込む。
【二人で手を繋ぎ、一緒に足を踏み出さなければ出られません】
「……何だこれは？」
「ドアの……ことでしょうか」
「……恐らく」
しばらく考えていたが、何も変わらない。篠崎と安西は手を繋ぎドアの前に立った。するとドアが下からするすると上に上がっていく。こんなドアの開き方は見たことがない。しかしここにいても仕方がないと、篠崎と視線を合わせて一歩踏み出した。

ドアを通り抜けると、そこはまた先ほどと同じ部屋だった。急いで振り返るが、たった今潜ったはずのドアは消えている。あるのはただの白い壁紙だ。
「……やっぱり夢？ですかね？」
「……それが妥当だがそうとも思えん」
安西と篠崎は手を繋いだまま部屋に立ち尽くしている。正面にはまた先ほどと同じドア。しかし今度は最初からタブレットが床に置かれていた。二人で覗き込む。
【置いていかないでください】
「……踏んでいいです？」
「待て諒くん、出れなくなったら困るだろう」
「……そうですね」
安西は不承不承頷いた。
タブレットの画面を見ながら会話を続けていると、勝手に画面が切り替わる。
【篠崎さんありがとうございます】
「名前知られてますよ」
「こんな悪趣味なことをする知り合いはいないはずだが」
「本当に悪趣味」
【酷いことを言わないでください】
「……踏みますか」
「賛成だ」
【すみません、説明しますからお待ちください！】
【ここは「出られなくなる部屋」です】
【私の指示に従っていただければ出ることができます】
【この空間にいる限り、現実世界は時が経ちません】
【ですから貴殿方が何年、何十年ここで過ごそうとも、あなたの家も、仕事も、友人も、何一つ変わっていません】
【ご飯を食べながら、散歩をしながら仕事をしながら、止まっています】
【これは貴殿方がここにいる間という意味で、貴殿方がいるせいで、という意味ではありません】
【彼らは自分が止まっていることにも気付きません】
【ここまで宜しいですか】
「何故俺たちなんだ」
【趣味です】
「踏みま」
【では次です！】
【この部屋を出たければキスをしてください】

「諒くん」
「は、ちょっと、する気ですか？！」
「さっさと出たいだろう」
「そりゃまぁそうですけど」
「どう考えてもここは現実世界じゃない。俺たちはホテルにいたはずだ」
「ええ……二人同時に同じところで記憶をなくすなんてあり得ないですしね……」
篠崎はゆっくりと安西の首に手を回した。そして優しく引き寄せる。
「ん……」
ふわ、と柔らかい唇が触れる。もっともっと大人なことまでしているのに、こんな子供みたいな触れるだけのキスは逆に恥ずかしい。触れて、すぐ離れる。部屋を見回しても何の変化もない。
「ドア、行ってみましょうか」
先ほどと同じように手を繋ぎ、同時に足を踏み出すとやはりドアが開いた。
「え」
ドアの先は先ほどの二つの部屋とうって変わり、高級ホテルやマンションの一室のようだった。入った部屋はリビングダイニング。黒い革のソファ、ガラステーブル、大画面テレビ。横にはスピーカーもついている。奥にはダイニングスペースとして汚れ傷ひとつない真っ白な机、椅子。奥には広いキッチンが見えている。振り返るが、今潜ったはずのドアはやはり消えていた。
「まだ戻れないのか」
「……みたいですね……」
篠崎と安西は慎重に歩を進める。とはいえ、だいぶ警戒心は薄れている。どうせ現実ではないのだ。危険も感じない。何か攻撃されるならとっくにされているだろう。
「広いな」
「ええ、冷蔵庫も大きいですし」
安西は冷蔵庫を開ける。中には豊富な食材と調味料が几帳面に納められていた。

キッチンからリビングまでの部屋の壁にはドアが四つあった。廊下がないのは玄関がないからだろうか、少し異質な作りのようだ。
「開きますかね？」
「やってみるか」
前の部屋から持ってきたタブレットを見ても何も表示されていない。手を繋ぎ、ドアの前に立つ。何もしていないが、ドアが開いた。
「ほお」
「トイレですね」
ドアの一つは広々としたトイレだった。成人男性二人どころか、五人ほど入れそうだ。

片面はすべて鏡張りになっていて、洗面台と見間違えるほどのしっかりした手洗い場がついている。棚を開けてみれば清潔そうな厚みのあるタオル。トイレットペーパーも質が良さそうだった。
「隣、行ってみましょうか」
言いながら安西がトイレを出ようとするが、ドアが開かない。
「え、うそ……」
「諒くん」
篠崎に促され、安西は手を握った。そして同時に足を踏み出す。すんなりとドアは開いた。
「どうやらトイレも二人一緒らしいな」
「え、無理……無理です！」
「……とにかく次を見てみよう」
次のドアの先は脱衣場だった。六畳ほどあるそこは大きな鏡と洗面台。シェーバーやら化粧水やらボディミルクやら、有名ブランドがずらりと並んでいた。しかし安西はすぐに気付く。
「これ、うちにあるやつと全部同じです」
「ああ、俺が使っているのもある」
どう調査したのかはわからないが、安西と篠崎が使い慣れているものが置かれているらしい。
見聞しつつ進んだ先のドアはやはり浴室だった。中はこれまた広く、壁にはソープにあるようなエアマットが立て掛けられている。端にはスケベ椅子。浴槽の横のボタンにはジャグジーやライトの調整まであって、まるでラブホテルのような浴室だった。二人で入っても十分どころか、洗い場に至っては二人で寝転んでもまだ余裕があった。そしてやはり、シャンプーやコンディショナー諸々は普段二人が使っているものと同じブランドが用意されていた。
次のドアは寝室だった。部屋の半分を占める大きなキングサイズのベッド。オレンジ色の間接照明がついた穏やかな部屋だった。ベッドの横にはティッシュとゴミ箱。それからゴムの箱。
「……必要最低限って感じですね」
「恋人向けではあるな」

最後のドアの奥は異質だった。入って正面には拘束椅子、三角木馬、分娩台が鎮座している。
入って右側の壁紙は薄い青。左側は薄い緑色と、不思議な配色の部屋だ。それら両側の壁には棚が設置されており、無数の大人の玩具が並んでいた。あっけに取られていたところで、タブレットが光り出す。

【この生活空間は最終の部屋です】
【この部屋から出たければ】
【夢精をしてください】
「…は？夢精？」
安西が思わず声に出すとタブレットが動き出す。
【夢精をすれば出ることができます】
【期限はありません】
【また、この空間にいる限り病気になることも、空腹を感じることもありません。もちろん死に至ることもありません】
【飲食は不要ですが、摂取すれば通常通り排泄が必要になります】
【退屈なときやプレイに必要なときはキッチンのものをご利用ください】
その言葉に、篠崎は内心安堵した。安西の排泄を見るのは好きだが、見られたくはない。ここはトイレすらも二人一緒でないとドアの開閉ができないというから密かに抜け道を考えていたのだ。
【よって、髪や爪が伸びることもありません】
そしてタブレットの画面が消えた。
篠崎はじっくりと室内を見た。見れば見るほどハードな玩具が揃えられていることに気付く。しかも玩具だけではない。医療用のグッズやコスチューム等、特別な趣向を持つ人を対象とするようなものまで揃っている。でもなぜか、それらはほとんど全て右側の青い壁の棚に置かれていた。
篠崎が一歩踏み出すとまたタブレットが光った。
【なお、この部屋はお二人がセックスを楽しめるようにと特別にご用意したプレイルームです】
【右側、青色の壁紙の棚にはあるのは安西さんが篠崎さんとお付き合いを始めてから自慰の際に利用した、もしくは利用する想像をした玩具や道具です】
【緑色の壁の棚は同様に篠崎さんのものです】
表示された文章を読んだ瞬間安西は、青色の壁に目を向けていた篠崎の目を手で覆った。
「み、見な、」
「もう見た」
「っ！」
「後で一緒に吟味しようか」
篠崎は自身のオナネタもばらされているのに動じる様子はない。開き直っているのか、恥ずかしいと思う対象ではないのか。しかしそれが思い違いだと、緑の壁を見てすぐにわかった。そこにはほとんど何もなかったのだ。つまり篠崎はオナニーをしていないか、もしくはオカズがとてもノーマルかだったのだ。
「それより諒くん、続きを読もう」

篠崎にそっと両手を外された安西は顔を真っ赤にして俯いた。興奮するような現状ではないはずなのに、その様子に篠崎はひどく興奮した。

【説明を続けます】

【正面にある大型器具は安西さんの自慰で想像されたものです】

読んですぐ、二人は正面に目を向ける。それは入室の際に異様に目を引いた拘束椅子、三角木馬、分娩台だった。

「や、しの、」

「もう見た」

震える安西の身体を篠崎が抱きしめる。耳に唇をつけ、大丈夫と言えば安西は震えに震えながらも何とかタブレットに視線を戻した。

【器具の奥まで進んでください】

安西は器具から目を逸らしながら、篠崎は吟味するようにじっくりと見定めながら歩を進めると、そこは壁一面にずらりとDVDが並んでいた。背表紙はそれぞれ文字が違う。近付き、確認する。

【安西・20xx.7.01】

【安西・20xx.7.01】

【安西・20xx.7.02】

【安西・20xx.7.05】……

安西の名前と日付のみ。パッと見た限りでは篠崎の名前のものは見当たらないが、この量だ、どこかにはきっとあるのだろう。

にしてもこれは一体なんなのか……安西が棚から取り出しジャケットを見る。横から篠崎も覗きこんだ。

――瞬間、安西はパッケージを投げ捨てた。

「あ、おい！」

「いや！見ないで……お願い……」

隠しようもないほどの、まるでレンタルショップのように綺麗に陳列された安西の文字のパッケージ。それらは全て、過去に自慰で想像したものを映像化したものだった。ずらりと並んだそれは数百枚はある。安西はペタリと床に座り込んだ。隠すのも諦め、安西は俯いている。篠崎はそんな安西に一瞥をくれると、棚から数枚を取り出した。

普通のDVDのように説明文やタイトルはない。しかし写真は安西が射精している瞬間であったり、四つん這いで尻から何か丸いものを排泄していたり――内容は文字などなくても想像に容易い作りになっていた。

「諒くんはとてもえっちだな」

「やだ……なんで……ごめんなさい……」

安西に先ほどまでの強気な様子はない。それどころか少々鼻声だ。泣いているのかもし

れない。その態度が、このタブレットの説明が嘘ではないことを示していた。
【説明を続けますが宜しいですか】
ピコンと音がして、タブレットが光る。篠崎は渋々そちらを見た。安西は精神的ショックが大きかったのかもう見向きもしない。
【お二人の体内は完全洗浄済みです】
【尿道も膀胱も肛門も直腸も髪の毛からつま先まで完全に消毒も済んでいます】
【舐めても噛んでも安心安全です】
【先程説明した通り、スカトロプレイや洗浄プレイをされる場合は飲食が必要です】
【プレイが終わり、体内の洗浄をご希望の場合はタブレットに向かって洗浄と言ってください】
【その際は身体内部だけでなく、表面に付着している汚れも全て綺麗になります】
【その他ご要望やご質問があればその都度タブレットに話しかけてください】
篠崎は文章を確認するとすぐさまタブレットを裏返しに置き、安西に向き直った。そして座り込んだままの安西を抱き締め、耳にキスをする。
「えっちな諒くんは大好きだよ」
柔らかい耳朶を食みながら言う。
「……ほんと？」
「ああ。これから一緒に見て、想像じゃなく現実にしよう」
「え……？」
「どれがいいかな……」
篠崎は次々とパッケージを物色していった。
剃毛されている写真、拘束されている写真、リードのついた首輪をつけ四つん這いで歩く写真、貞操帯をつけた安西の陰茎の写真、オムツをつけた姿の写真――。
正直、篠崎の想像を越えるほどのMっぷりだった。しかし何一つ、篠崎はひくことがなかった。どれも魅力的だったし、彼の夢をすべて叶えてやりたい、その一心しかなかった。
「諒くん、どれがいいかな？」
「やだぁ……」
いやと言うその声にも甘えが含まれている。もう、可愛くてたまらなかった。
夢精をすれば出られる。それなら早々に禁欲をすべきなのに、性に従順な二人は当然のように楽しむことを選択していた。ここにいる限り現実世界の時が進まないのなら、普段が忙しい分好き放題楽しんでもバチは当たらないはずだ。

三.

「これは？」
篠崎は棚から取り出したDVDを安西に手渡した。安西は目に涙を浮かべながらも少しだけ頬を染めて受け取る。
ジャケットの表面はオムツ姿の安西がコーヒーを飲んでいる写真、裏面はベッドで篠崎の腕枕で安西が横になっているだけの写真だ。オムツをしていることを除けばいつもと変わらない写真。
「あ……」
「このときはどんな想像でオナニーを？」
「……日常的に……オムツをあててもらって……」
「それで？」
「篠崎に逆トイレトレーニングをしてもらって……だんだん自然にオムツに排泄できるようになって……」
「それで？どこまで想像して射精した？」
「……無意識におねしょができるようになって、大人なのにって恥ずかしくて、けど、篠崎には褒めてもらったところ……です……」
「ほぉ……それはいいな」
篠崎はそのDVDケースを床に置いた。続いてまたひとつ取り出す。次のジャケットには尻を突き出し、後ろ手で自ら尻を開いた安西の姿。肛門には何かチューブのような機械のようなものが刺さっている。しかし先は見切れてしまっており、それが何かはわからない。
「これは何が入っているんだ？」
「あ……それ、は……カメラ……です……」
「直腸の内診用かな？」
「はい……おしりの中……前立腺や、僕の気持ちいいところを解説されながら中を見せられて……その後おちんちんを入れてもらって、中に出してもらって、それからもう一度カメラを入れられて篠崎の精液を見せてもらって……種付けだよって優しく言われて、射精しました……」
「上手に説明できたな」
「ん……」
頭を優しく撫でる手に、安西は犬のようにすり寄った。恥ずかしいことを説明させられて、下着の中はすでにバキバキで、どろどろだ。けれどまだ射精はしたくない。もっともっと恥ずかしくて気持ちよくなりたかった。

〜〜〜〜

一枚目――。

『やだ……怖い……』
画面の中、全裸の安西は涙をぽろぽろと溢している。場所はキッチンだ。
『諒、大丈夫怖くないよ』
篠崎はむずがる安西をキッチンのシンク横に持ち上げ座らせた。そして泣きながらも勃起している安西のペニスに触れる。
『ちゃんとお口を開けられて偉いな』
お口、とは尿道口のことだ。カメラが亀頭をアップにする。てらてらとカウパーで光るそこは解放を待ちわびて口をパクパクさせている。
『やだぁ』
篠崎はすぐ横にあるシリンジを手にした。中にはぬるま湯が入っている。
『まずはお湯だけを入れような』
シリンジが尿道口に添えられ、ゆっくりとお湯が押し込まれていく。
『あっ……あぁっ！入ってる！』
虐められ慣れた尿道は痛みではなく快感ばかりを拾ってしまう。いやなのに、怖いのに、美味しそうに飲み込むペニスはしっかりと勃起を保っている。
『うん、美味しそうに飲み込んでる』
シリンジのお湯が全て膀胱に消え、篠崎はシリンジを置いた。そしてその横に置かれたボウルを手に取る。
『ほら、ごらん』
ボウルの中には先ほどと同じお湯が入っている。
『いや……あぁ、どうしようかな』
篠崎は動きを止めるとしばし考えていた。しかしすぐに隣にある袋を手に取る。
『少しボウルで柔らかくしてからの方がいいかと思ったんだが、それでは物足りなさそうだから、硬いまま入れようか』
『っ……』
小さな粒の乾燥タピオカをシリンジに入れ、それからボウルのお湯を吸っていく。シリンジの中でタピオカが泳いでいる。
『入れるよ。しっかり見なさい』
安西はゆっくりと視線を動かした。シリンジが見せつけるように揺らされ、そして尿道口へ――……
『あっ！！』
先ほどのお湯とは比べ物にならない。小さいとはいえ固形のそれが尿道を擦りながら進んで行く。
『あぁああっ！！！』

～～～～

画面の中では歩道をゆっくりと歩いている。そして道行く人に見られ、視線に喜ぶペニスから涎を溢している。前方を見ると遠くに知っている犬がいた。こちらに向かって歩いてくる。
『あぁ、ほら、お隣のワンちゃんだよ。確かオスだったな』
『わん……』
安西の歩みが遅くなる。あの犬は苦手なのだ。会う度に発情して、交尾をしようとしてくるから。安西の、ご主人様だけのアナルにペニスを入れようとしてくるから。それに飼い主の女の人はご主人様に気がありそうなのだ。だからいやだ。
『わん！！わん！』
行くな！引き返そう、そう訴えかけるがご主人様は少し困ったように笑いながらリードを引っ張っていく。首が締まってしまうので、しぶしぶ進んだ。
『あら。篠崎さん』
『こんにちは』
『今日も諒くんは元気そうですね』
『えぇ、ポチくんも元気そうで』
主人同士が話している間にポチが近くにやってくる。いやなのに、ポチの方が動きが俊敏なので簡単に背後を取られてしまう。そしてアナルに感じる濡れた感触。鼻だ。犬の濡れた鼻がアナルに触れている。匂いを嗅がれている――。
『最近発情期になったらしくて……主人と相談して今度去勢しようかと思うんですけどね』
『去勢ですか』
『諒くんは去勢は？』
その場でくるくる回り、なんとか尻を守る。今は人の言葉を話せないから、ポチからお尻を守る方が大事だ。
『考えてみます』
しかし耳に入ったその言葉にぞくりとした。去勢？おちんちんを取られてしまうのだろうか。

〜〜〜〜

『尿道口がパクパクしているよ。可愛い……今からどんな目に遭わされるのか、このおちんちんは分かっていないのかな』
穏やかな口調が恐怖心と興奮を煽る。
『……あっ！！！』
突然腹に感じた痛み。熱さ。
『あぁ、綺麗だ。やはり肌に映えるな』

『な、に……？』
『ん？わかるだろう？蝋燭を垂らしたんだよ』
『あ……うそ……』
安西はまだ蝋燭を経験したことはない。好奇心からプレイの仕方を検索したことはあるので、それが低温蝋燭で、肌から離して垂らせば怪我をすることがないことはわかっている。
けれど今は視界を覆われている。篠崎がどれほどの高さから落としているのか分からない。篠崎が蝋燭プレイのやり方を知っているのかどうかも。
『っ！！！』
少し不安に思ったところで、また衝撃が安西を襲う。今度は乳首だった。しかもさっきより刺激が鋭い。熱さも尾を引いて、ジクジクドクドクとなっている。
（もしかして、至近距離から垂らされた……？）
そう思った瞬間、怖いという感覚が襲う。怖い、至近距離でペニスに蝋を垂らされたら――。
『っ！！！！あああああ！！』
何も見えないせいで、感覚が鋭い。突然の痛みに叫んだ。ペニスが焼ける。壊れる。
『ああああ……』
『痛いか？』
『い……痛い……痛いです……熱い……』
『まだおちんちんの付け根に垂らしただけだよ』
『あぁぁ……』
付け根なんて。付け根なのにあの痛みと熱さなら、もし亀頭に垂らされたらどうなってしまうのだろう。
『今からどんどん垂らしていくよ。おちんちんが動いたり、萎えたり、イったりしたら型が取れないからやり直しになる。気を付けなさい』

〜〜〜〜

六枚目――。
『いた……』
安西は篠崎の方を向き立っている。手をぎゅっと握りしめ、クリップが皮を挟む痛みに耐えている。
『うん？』
『いたい……です……』
『どこが？』

『おちんちんのかわ……』
『うん、だが、クリップで挟んでいるんだから当たり前だろう』
『……はい……』
『重りをつけるぞ。今日は十グラム増やしてみようか』
『あ……そんな……』
『壁際に立ちなさい』
『はい……あっ、あ――――っっっ！！！！いだい、いだいいいい！！！』
容赦なく錘が付けられた。激痛が走る。
『諒』
『あっ、やだ、おちんちんこわれちゃう、皮きれちゃう！』
『大丈夫だ、ほら、』
そう言って篠崎は救うように垂れた錘を手のひらで支える。重みが消え、安西がほっと息をついた瞬間――
――ぽろん
『～～～～～～っっ！！！』
『ふ、さっきより伸びたな』
篠崎が錘を落としたのだ。安西は激痛に足を震えさせている。
『あ……あ……』

～～～～

「ではお尻をちょっと開きます。力を入れると痛いですからね、抜いていてください」
「はい」
ふー、と息を吐く。怪我はしたくない。おちんちんは使わないからいいけれど、お尻を怪我してしまうと篠崎のおちんちんを入れてもらえなくなってしまう。
「ぁ……」
何か、無機質なものが入ってきた。何かは分からないけれど、硬くて冷たい。
「はい、開きますよ……」
その言葉にそれが開肛器だと分かる。
「あ……開肛器……」
「いえ、違いますよ」
思わずつぶやいた言葉に鋭い指摘の声が刺さる。
「これはクスコです。違いはわかりますか」
クスコ――それは女性の膣を見るときのものだ。アナルのものとは違う。
「え……なんで……」
「ここは彼氏にいつも可愛がられて、男性器を咥えこみ慣れた女性器でしょう」

「やっ」
操作されたのか、アナルがぐっと拡がった。
「あぁ、ほら、中に精液が残っている」

〜〜〜〜

トイレの中。今思えばこの片面が鏡張りなのはこういうプレイを予想してのものなのだろう。
「立ってする？それとも座るか？」
「あ……た、立って……」
「後ろから支えてあげよう」
便器の前に立った安西を後ろから包み込むようにして篠崎が抱き締める。
「あ……あ……」
「うん？……諒くん、ここでは好きなことを言っていいんだ。言葉にするともっと恥ずかしくて、もっと気持ちよくなれるのを君はもう知ってるだろう？」
「あ……ひか、ない……？」
「まさか！これからあのDVDを全て観て、全て実行に移そうと思っているのに」
「あ……そんな、やだぁ…」
安西が甘えるようにやだぁと言うのはぐずぐずに溶けてきた証拠だった。
「ほら、おねしょできるように頑張るんだろう？」
「あ……ん……おちんちん、さわって……オムツの上から、ぎゅって……」
「こうか？」
篠崎の手がオムツの前張を包み込む。
「あ、んっ、でる、あ、でちゃ、出る、でるぅっ……！」